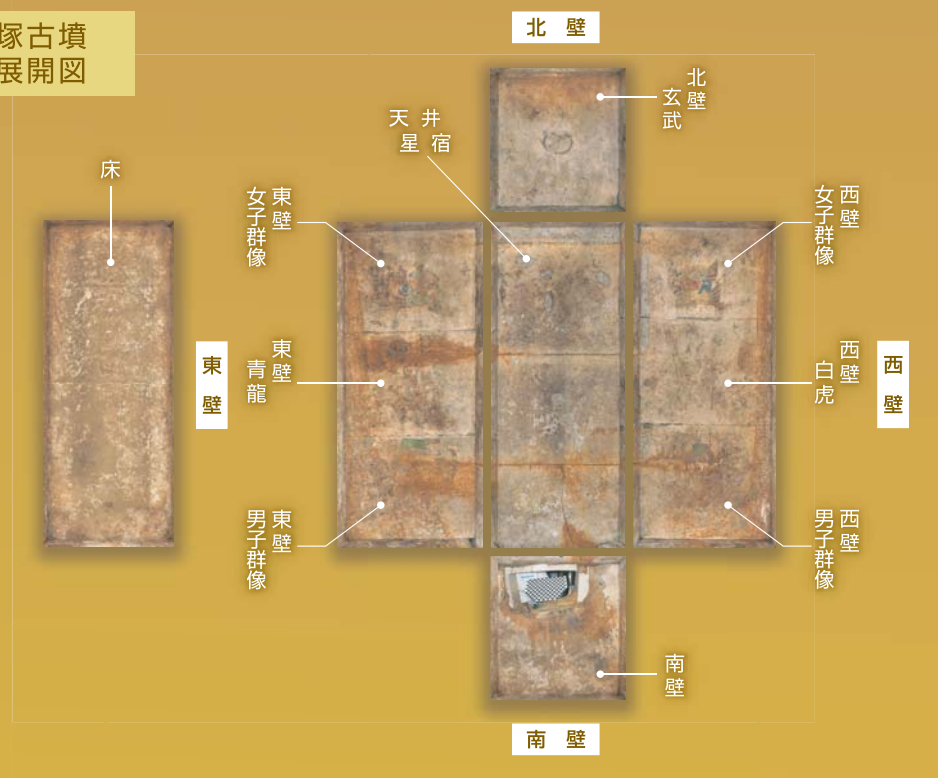


高松塚古墳  
石室展開図



修理事業室  
石材配置図



文化庁文化財部古墳壁画室  
TEL: 03-5253-4111(代表)



平成22年10月

- ・主催：文化庁、独立行政法人国立文化財機構（奈良文化財研究所・東京文化財研究所）、国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所、奈良県教育委員会、明日香村
- ・場所：国宝高松塚古墳壁画仮設修理工事施設（奈良県高市郡明日香村・国営飛鳥歴史公園内）
- ・写真撮影：奈良文化財研究所、文化庁

平成22年秋の一般公開

# 国宝高松塚古墳壁画 修理作業室の公開

公開期間：平成22年10月30日(土)から11月7日(日)まで



見学用通路の窓ガラスから見た修理事業室内



修理作業の様子



科学分析(顔料等調査)の様子



平成21年の公開時の様子



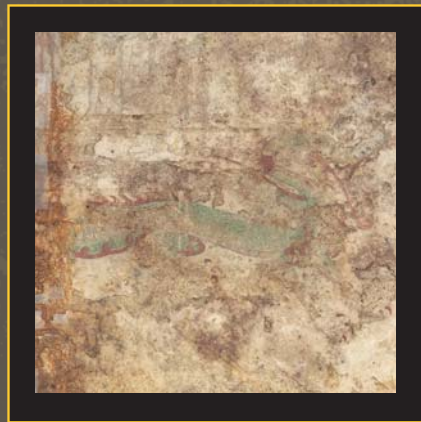
西壁女子群像が描かれた石材



西壁女子群像(拡大)



東壁青龍が描かれた石材



東壁青龍(拡大)



西壁白虎が描かれた石材



西壁白虎(拡大)



北壁玄武が描かれた石材



北壁玄武(拡大)

## 図像解説

高松塚古墳の壁画は、いずれも凝灰岩の表面に塗られた厚さ数ミリメートルの漆喰の上に描かれています。

飛鳥美人の名で親しまれている女子群像は、石室西壁の最も北寄りに描かれていました。四人の女子が黄、薄桃、赤、緑の衣を着け、左右思い思いの方を向いています。頭の位置をあえてふぞろいにし、また四人を少しずつ重ねるように描くことで、人物の間に自然な奥行きを作り出しています。その手には「孫の手」のような形の「如意」や柄の長い団扇状の「円翳」を持っています。黒く長い髪は首の後ろあたりで束ねています。顔や衣の輪郭は柔らかな墨の線で描かれており、肌には淡い桃色を塗り、唇は鮮やかな赤です。

東壁の青龍は、四神(青龍・朱雀・白虎・玄武)のうち東方の守り神とされ、東壁の中央に描かれていました。首をS字状にもたげ、前脚を前方に伸ばし、大きく開いた口には赤く長い舌が見えます。画像の左側は石材のすき間から流れ込んだ泥水によって失われています。壁面の上方には、金箔を貼って日像があらわされていますが、過去の盗掘のうちに、人為的に削り取られています。

西方の守り神である白虎は、西壁の中央に描かれていました。劣化により図像が見えづらくなっていますが、その形は青龍に近く、長い胴にS字状にもたげた首をもちます。基本的には黒い線で描かれ

ますが、口や爪に濃い赤が、腹には淡い赤がほどこされています。上方には銀箔を貼った月像(月輪)があらわされています。

北壁の玄武は、北方の守り神であり、灰色の亀の上に青緑色の蛇が円を描くように巻き付いています。亀と蛇の頭が描かれていたとみられる中心部分が漆喰ごと失われているのは残念ですが、その形はキトラ古墳の玄武と極めて近いことが知られています。

## 壁画の劣化原因調査

高松塚古墳壁画は、昭和47年の発見以降、度重なるカビ等の被害により劣化が進行し、平成19年に石室の解体修理に至りました。

文化庁では、平成20年度から21年度の二年間にわたり、考古学・美術史学・保存科学・微生物学・材料科学・文化政策等の専門家で構成された「高松塚古墳壁画劣化原因調査検討会」を設置し、壁画の劣化原因に関する科学的・学術的な調査を行いました。

壁画発見以降、特に昭和55年から59年頃と、平成13年から17年頃の二つの時期に、保存施設の空調機能の不具合等により、石室内に多量のカビが発生しました。その対処法等の人為的な要因を含む複合的な原因により、壁画の劣化が進行したことが明らかになりました。また、白虎は、昭和55年から56年に大きく退色したことが分かりました。

この調査の成果は多岐にわたりますが、高松塚古墳壁画の今後の保存活用に資することはもちろん、キトラ古墳壁画をはじめとする他の文化財の保存活用にも生かしていけるよう努力してまいります。

高松塚古墳壁画劣化原因調査の詳細は、文化庁ホームページ([http://www.bunka.go.jp/takamatsu\\_kitora/kentokaito/rekkachosa/index.html](http://www.bunka.go.jp/takamatsu_kitora/kentokaito/rekkachosa/index.html))をご覧ください。